

有限会社吉彦製作所



木を知っているから、木の良さを生かせるんです

代表取締役 太田 智之さん

毎日、木をみて、木をさわって、木を削る。そうやって、木を知ることで木を扱えるようになります。うちで作る「くり棒」は大きい物で1本作るのに1時間以上かかります。シンプルなものなら、1日に100本作ることもやっていましたが、すべて手で作るので同じように見えて、ひとつずつ風合いが異なる。それぞれ表情を持っているんです。

一番大きいもので、直径1m、長さ6mの天井の飾り部材を使用することがあります。大きなものはセットするのも大変。回しながら、刃がとんだらあかん。一番早くきれいに仕上がる回転速度をやりながら見つけていくんですわ。速くまわしたほうがきれいになれるわけありません。

真面目に仕事していると、クチコミでお客様がお客様を紹介してくださいます。機械で作るのは違う手で作って欲しい、と言うお客様をこれからも大事にしていきたいです。

デザイン性やこだわりは絶大な人気を誇る家具メーカー「graf」の製品でも、吉彦製作所が加工した木製品を使用している。

毎日、木を見ていけば、よし悪しはわかる。この仕事も回利が大きい。大切なんですよ。生ま物相手のので、つぎの個性が違ってくる。まぎろ相手のクマも、わかってやらんと上手くいきません。



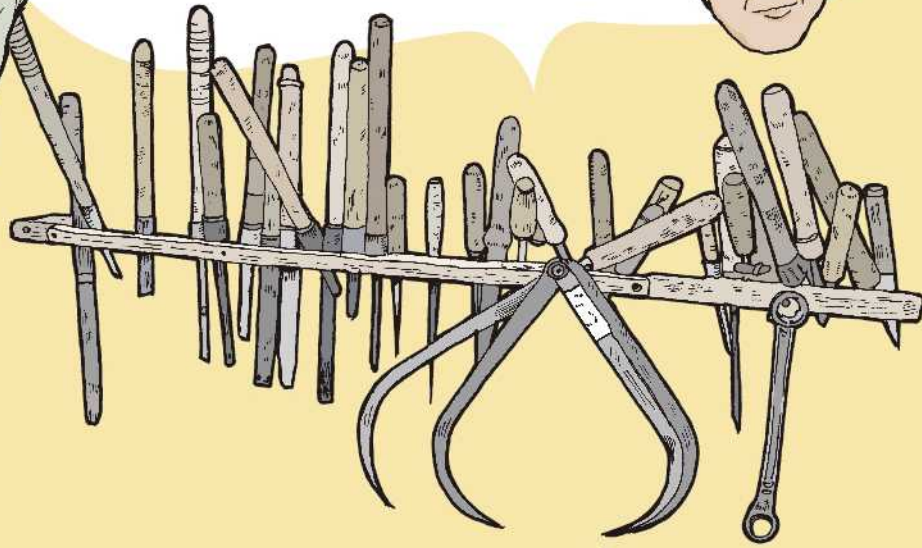
既製品には遠く細かな飾りも、手作業をいれるから、木に「生」がある。木に「生」があるから、木に「生」がある。木に「生」があるから、木に「生」がある。





道具は自分の体の一部といっしょ。
どれも使い込んで年季が入ったもの。
先代から引き継いだものも今だに現役。
ないものは自分で作ることも。

「出来ひんかつたら、しゃーない。失敗してもいいからやれそれが勉強や」と親に言われてましたから。



グラインダーを早くまわすと、刃物の焼きが戻るといって、熱がこもり変形する。変形した刃物は、グラインダーで研いで修正。

我が社の自慢 製作した **くり棒を発見!**

祖母が亡くなった時に使用した霊柩車に、変色している檜の欄干の柱が4本ついていた。その形や削り具合から、お母さんが作ったものだった。また街を歩いていた時、下着屋のディスプレイで使用されているテーブルの脚にも使用されていた。自分のつくった「くり棒」は見たら分かるそうで、思わぬ再会にうれしくなるとか。

基本どんな仕事も断りません。「出来ひんかつたら、しゃーない。失敗してもいいからやれそれが勉強や」と親に言われてましたから。

母がはじめた「くり棒」製作 手で作る温もりにあふれる

吉彦製作所の歴史は、明治までさかのぼる。明治40年、社長の曾祖父がかんなの製造を行う「大阪吉彦製作所」を創業。その後、かんなと釘やとたなどの製造・販売も行うようになり、法人化。時代は進み、昭和に。嫁いできた社長の母の実家は、バットなどの木工品製造業で、家業を手伝っていた母は「くり棒」の製作技術を修得。くり棒とはテーブルや椅子の脚部、階段の手すり、仏壇用のりん棒などの装飾を施した木の棒。製作所の端で母がくり棒を造り始めるとお客様が増え、かんな製造よりも多忙を極めるほどに。女性が器用に木をけずっていく姿も話題になったそうだ。

社長は同業他社で修業をして家業を手伝うように。木によって、削ることで曲がったり反ったりする。硬い木は頑固なのでゆっくり、やわらかく素直な木は素早く。木材の種類だけでなく、同じ檜の木でも根っこや枝に近い部分は硬いといった違いがある。手で持ちさわった感覚、色目、木目を見てその特徴を瞬時に見極める。それを刃物の形や種類で、手の感覚で丸いフォルムや四角、模様などに仕上げていく。

時代とともに、安価な既製品も増え、くり棒自体のニーズも減っているのは事実。それでも、吉彦製作所をお願いしたい、という家具製造や家具店がある。太田さんが作り上げる、気持ちのこもったくり棒に魅了されている人は多い。

品質優良
録
各種面鉋
創業明治四十年
吉彦
大阪吉彦製作所

有限会社 吉彦製作所
〒544-0025 大阪市生野区生野東3-5-24
TEL 06-6731-0026 FAX06-6731-2456
事業内容/木材加工品、木製製品の製造